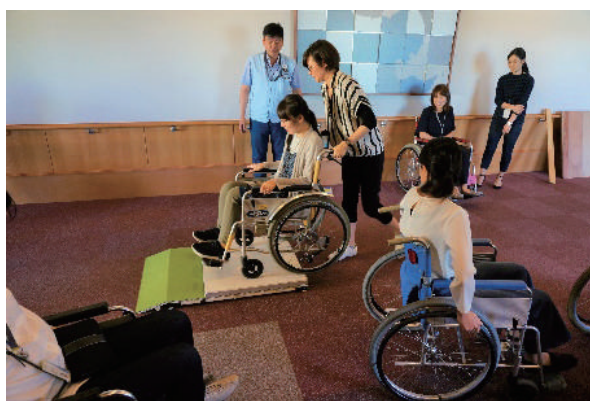


を持てるような環境をソニーグループに根付かせるため、本社人事センターと連携しグループからの障がい者雇用に関する相談や問い合わせに対し、ニーズに応じた支援や協力、情報提供などを行っている。具体的には、①ソニーグループへの知識習得と意識啓発を目的とした、ソニー・太陽での障がい者雇用研修の開催、②障がいのある方が職場に配属される前に受入職場セミナーを実施し意識のバリアを払拭、③ソニーグループの総合力を集結した障がい者向けのグループ合同採用企画などを実施している。さらにソニー・太陽は、ソニーグループ各社の障がい者雇用推進に関する合理的配慮の相談窓口にもなっており、グループ各社の人事担当者や障がいのある社員から直接寄せられた相談に対し、アドバイスや対応も行っている。



ソニーグループへの知識習得と意識啓発を目的とした障がい者雇用研修の様子

3 今後の課題など

ソニー・太陽は付加価値の高い製品のものづくりを行ってきたが、海外との競争もあり、ものづくりを補完する事業をどのように確保していくかが今後の課題となっている。ソニー・太陽としては、社員が働き続けることのできる雇用の維持と会社としての自律を共存させることが創業者の理念を追求することと考えており、ソリューション系の業務など、新たな業務を積極的に取り組みたいとのことであった。

障がい者雇用を考えている他社へのアドバイスとしては、経営トップが障がい者雇用の方針を掲げ、その考え方をいかに組織全体に浸透させるかがポイントであるという。さらに採用・雇用においては、採りたい人物像を明確にし、育成プランを立て、その人の特性をよく把握し、将来性も考え、会社の戦力として育て上げるという強い意思を持つことが重要とのことであった。

(3) 企業との連携、地域社会との農福商工連携などによる障害者就労支援の取り組み（社会福祉法人進和学園しんわルネッサンス）

【ポイント】

- 地域社会、本人、職員、ボランティア、家族、法人役員及び行政の「七つの輪のチームワークこそ福祉の原点」を理念として、就労継続支援A型・B型・就労移行支援事業に取り組む。

- 企業と連携した自動車部品組立事業では、高い品質の製品の生産を行い、ISO9001を知覚的障害者部門では日本で初めて取得。
- どんぐり苗育成、トマトジュース製造、地元スーパーでの施設外就労など地域に根ざした取組みを通じて、障害者の就労の場の拡大を目指す。

1 理念は「七つの輪のチームワークこそ福祉の原点」

しんわろネッサンスは、神奈川県平塚市に位置する、社会福祉法人進和学園（以下「進和学園」という。）の運営する就労継続支援A型・B型・就労移行支援事業を行う施設である。しんわろネッサンスは2006（平成18）年に開設され、自動車部品組立を中心としながら、どんぐり苗育成、食品加工、施設外就労などに取り組んでいる。法人全体では、2018（平成30）年3月末、障害部門で12施設、利用者約500名、職員290名の規模となり、保育園部門で4施設、園児約320名、職員80名の規模となっている。

進和学園は、前理事長が平塚盲学校で教師として知的障害を持つ女性と接した経験から、障害児を支えていきたいとの強い思いの下で、1958（昭和33）年に障害児のための児童福祉施設として設立され、さらに、利用者の成長に合わせて、1974（昭和49）年に就労支援のための職業センターが開設された。

進和学園の理念は、「地域はじめ社会の支援、本人の勇気、職員の努力、ボランティアの協力、家族の団結、法人役員の熱意、行政の応援、この七つの輪のチームワークこそ福祉の原点」ということであり、「一人には一人のひかり」、「本人中心」、「ひとはみんなのために、みんなはひとりのために」といった標語を掲げている。

2 取組み内容－本田技研と連携した自動車部品組立事業

しんわろネッサンス（前身の職業センター）では、1974年、かつて本田技研工業株式会社（以下「本田技研」という。）の社員であった進和学園の理事の尽力と同社の本田宗一郎氏などの協力の下、自動車部品組立をスタートさせた。現在では、就労継続支援A型事業（以下「A型」という。）の利用者は、自動車部品の受入れや部品の投入準備・検査などの管理部門の業務を主に行い、就労継続支援B型事業（以下「B型」という。）及び就労移行支援事業（以下「就労移行」という。）の利用者は、ライン形式での自動車部品組立作業を行っている。

特徴的なのが製造ラインの組み方であり、取得している力量に応じて「一人一工程」を受け持ち、検査員としてA型の利用者を主に配置している。それぞれがチームワークを発揮して、一つの製品が生産される。このことは、A型の利用者が責任感を持って管理業務を行うことにより、B型の利用者が身近なA型の利用者を目標としたりするなど、お互いに刺激を受けて意欲を高める効果を生んでいる。

また、自動車産業の高い品質水準確保の要求に応じるため、施設内で障害の特性に応じたオリジナルの治工具（組み立て作業や検査、数量確認などを行うために用いる道具）を製造している。自動車部品の仕様は車のモデルチェンジに合わせて変わることから、ほぼ毎年新しい部品に合わせた作業方法が決まる。そのたびに、約40年の経験及びノウハウを元に、これに応じた治工具をゼロから開発することにより、高い品質水準を維持してい

る。

品質向上への取組みをさらに徹底させるため、2007（平成19）年には、利用者及び職員全員で品質マネジメントシステムISO9001^{*4}を取得した。これは、知的障害者部門では日本で初めてのことであった。



チームワークを発揮したライン形式での自動車部品組立作業

進和学園と本田技研の取引の仲介をする営業窓口会社として、株式会社研進（以下「研進」という。）が職業センター創設時から設けられ、大きな役割を果たしている。研進は、本田技研とその部品メーカー約60社と包括的な売買契約を結んでおり、本田技研から発注された仕事に関して、部品メーカーから部品を購入し、進和学園に組立・加工を委託し、製品を本田技研に買い取ってもらうという業務を行っている。また、売買契約に基づく資金繰りや本田技研との加工賃交渉、各種コスト負担などについても研進で行っており、在庫・仕掛・輸送中のリスク負担を行っている。

3 事業の多角化—どんぐり苗育成、トマトピューレ製造など

2008（平成20）年秋のリーマンショック以降、自動車部品関係の業務が減少傾向となったため、しんわルネッサンスは事業の多角化を図ることとした。当初、事業の新規開拓について苦勞を重ねたが、地域での農作業や地元スーパーでの手伝いに関する依頼に丁寧に対応し、地域社会との信頼関係を築いたことで、新規又は継続して依頼を受けることが増えた。

現在では、①マルチタスク業務（育樹・除草作業や清掃、ワックスがけなどの業務）、②どんぐり苗育成（環境保全のための植樹に利用される）、③地元スーパーしまむらストアでの施設外就労（商品の陳列や野菜の袋詰めなど）、④食品加工事業（トマトピューレ・トマトジュースの製造・販売など）、⑤給食事業を行っている。

しんわルネッサンスは、今後とも、地域に根ざした取組みを通じて、このような企業や

^{*4} ISO 9001とは、企業などが、顧客や社会などが求めている品質を備えた製品やサービスを常に届けるための仕組みについて「国際標準化機構（ISO）」が定めた、世界共通の規格である。その仕組みを更に良くしながら顧客の満足度の一層の向上を目指すためには、どのような組織にしたらよいのか、責任分担をどうしたらよいのか、どのような方法で仕事をすればよいのかについて定めている。（公益社団法人日本適合性認定協会ホームページ「マネジメントシステム認証」を参考）（最終閲覧日：2018年9月26日）

地域との好循環を作り、さらに障害者の就労の場を拡大していくこととしている。

(4) 生産性を向上させて高工賃を実現（社会福祉法人武蔵野千川福祉会チャレンジャー）

【ポイント】

- 生産性を向上させることで高工賃を実現している。
- 生産性向上のために、①事業所に適した仕事選び、②作業工程の分析と見直し、③利用者の意識改革に取り組んでいる。
- 高工賃は、利用者の働くことへのモチベーション向上に大きく寄与している。

1 高工賃を実現する就労継続支援B型事業所

チャレンジャーは、東京都武蔵野市にある就労継続支援B型事業所である。利用者は31名おり、全員が知的障害を抱えている。運営する社会福祉法人武蔵野千川福祉会は、4か所の就労事業所と2か所の生活介護事業所を運営しているが、チャレンジャーは其中で最も「働くこと」を重視した事業所である。

チャレンジャーでは、働く意欲の向上に成果の評価が重要という考え方から高工賃を目指しており、そのために生産性向上に取り組んでいる。

① その事業所に適した仕事を選ぶ

まず、事業所に適した仕事を選ぶことが重要である。チャレンジャーの主な事業内容は、カタログなどの封入封緘作業である。これまでシャッターの部品製造、箱の組み立てなど様々な事業を経験して、この封入封緘作業にたどり着いた。

「仕事を決めるときは、社会で役立っていることが実感できるもの、自分が何を作っているのかわかるものが良い」とチャレンジャーの所長は言う。カタログを袋に入れ封をして、ラベルを貼り、納品・発送する。一連の作業で一つの物が仕上がっていく過程がわかりやすく見えるため、利用者は自分の仕事がどのように活かされるかがわかり、達成感や仕事への意欲につながっている。

また、封入封緘作業は、発注元が変わったとしても作業方法がほとんど変わらないので、新しい作業に対応することが得意ではない知的障害を持つ利用者にとって、利点となっている。

② 作業工程を分析し見直す

まず、作業工程の中の加工、検査、運搬、停滞などの各要素について分析し、どう組み合わせれば効率の良い工程になるか検討を加え、作業工程の見直しを行った。

そして、送付状とチラシを封入する場合に、片手で順番に1枚ずつ取るのではなく両手で2枚同時に取りようにする、封緘作業がしやすいように封筒の向きをそろえて置くなど、「正しい作業の手順」を決めて、それに沿って作業を行うことで、無駄の発生を意識的に防止した。

さらに、作業で使う器具の名称を統一する、場所ごとに番号を付けるなど、「そこ」「ここ」といった、ミスを招きやすい曖昧な指示がなくなるように工夫をした。